

## 柴崎測量隊を支えた山案内人／ 宇治長次郎とその後

日本測量協会 理事  
瀬戸島 政博

「劔岳，冠松，ウジ長，熊のアシアト，雪溪，前劔……ヤホー，ヤホー」という書き出しで始まる「冠松次郎におくる詩」が室生犀星の詩集に収録されている<sup>1)</sup>。この詩中で「ウジ長」と書かれているのが宇治長次郎である。長次郎は冠松（冠松次郎）と共に黒部峡谷を跋涉し、劔岳よりもむしろ黒部の名山ガイドとして名を馳せた。

宇治長次郎（1871（明治4）～1945（昭和20）年）は、世界山岳事典<sup>2)</sup>や岳人事典<sup>3)</sup>にも掲載されている名山ガイドである（図-1）。富山県上新川郡大山村（2005年4月1日



図-1 宇治長次郎の面影  
（『劔岳測量100年』による）

の合併により現在は富山市）出身で、幼年から山仕事に従事し、伐採作業や木材流し、砂防工事などで生計をたてる一方、山案内人としてその能力を発揮した。1902年（明治35）頃から陸地測量部の測量作業の人夫として山々を歩き、30代後半の円熟期

にあたる1907年（明治40）7月、柴崎芳太郎測量官らによる三角点設置のための劔岳登頂に参加している。

劔岳への測量登山以降は、日本山岳会会員との山岳行を共にし、田部重治\*<sup>1</sup>、冠松次郎\*<sup>2</sup>、小暮理太郎\*<sup>3</sup>の同会創設期の会員らに実力が認められ、劔岳、立山、黒部の登山開拓に力を注いだ。

### 1. 劔岳，再び劔岳へ，そして長次郎谷の命名

1907（明治40）年7月の柴崎測量隊による劔岳への測量

登山と、その2年後（1909年）の7月になされた地元富山県の青年ら4人による劔岳への趣味登山によって、長次郎らの立山ガイドがわが国の近代登山史に登場する機会となった。

新田次郎原作『劔岳〈点の記〉』では、柴崎測量官らの宇治長次郎による劔岳登頂の場面が息の詰まるような表現で、次のように描かれている<sup>4)</sup>。

「旦那、それは私が背負い上げましょう」と長次郎が云ってくれたので柴崎はほっとした。

「やってくれるか、気をつけてくれよ」と柴崎は云った。長次郎はその木材を彼の背負い袋の上に横に結びつけ、手で持ち上げて、左右のバランスがとれるように何度か位置を変えた。それだけでは物足りないのか、背負って、二、三步歩いてみて、更にその位置を少々変えたほど慎重だった。

長次郎は十尺の木材を背負ったまま、はだして岩壁に取り付いた。動きは遅かったが、確実に登っていった。五人は声を出さずに、祈るような目で長次郎を見守っていた。

文春文庫 新田次郎『劔岳〈点の記〉』（2007年7月15日新装版第4刷，pp.309-310）より

このような難行苦行の末に、柴崎測量官と長次郎らは劔岳に登頂したのと思われるが、柴崎芳太郎による「越中劔岳先登記」<sup>5)</sup>には他の人夫名は挙げていないものの宇治長次郎の名は全く記載されていない。これについては、柴崎芳太郎の子息である柴崎芳博氏は「劔岳登頂をめぐる一ある疑問点について」の中で、「長次郎は敬虔な仏教徒であるというから、劔岳に対する登山禁忌の思想は直接或は間接に浸透していたにちがいない。したがって、長次郎

にとって劔岳は登ってはいけない山という伝統的心情のため、雪渓を登りつめながら登頂を断念したというのが真実ではなかろうか。」と推測している<sup>6)</sup>。

1909(明治42)年7月の劔岳登頂は、若手日本画家として知られていた石崎光瑠\*<sup>4</sup>をリーダー格に、当時東京大学学生であった河合良成(後に農林大臣、小松製作所社長)、吉田孫四郎、野村義重の4人と、宇治長次郎ら3人を案内人とするパーティで、柴崎測量官と同じルートで登頂した。その際、長次郎は「ああ、あの劔岳にゃ、二度と登るまいと思うとったのに……」と溜息ともつかず、懐旧ともつかず、呟いていたと言われている。

この時期の登攀について、吉田孫四郎は「越中劔岳」の中で、「……是ぞ陸地測量部員が幾多度の登攀を試み失敗を重ねたる末。終に撰んで成功し得たる劔嶽唯一の登路なれ。……余等之を長次郎谷と命名す。」と述べており、当時無名の山岳案内人であった長次郎の名が俗名とされるほどに、いかにも頼もしい存在であったことが窺われる(図-2)。



図-2 長次郎谷の遠景  
〔劔岳測量100年〕による)

## 2. 長次郎の名を馳せた黒部溪谷の跋涉

宇治長次郎は、今では劔岳よりもむしろ黒部の名ガイドとして多くの人たちに記憶されている。それは冠松次郎と

の黒部峡谷の数多くの廊下<sup>7)</sup>を渉猟したためである<sup>8)</sup>。長次郎は、1915(大正4)年夏に田部重治、木暮理太郎と共に毛勝岳から劔岳への難コースの初踏破をし、1919(大正8)年には木暮らと黒部の廊下を渉猟した。そして、木暮の紹介により登山家の冠松次郎との出会いとなる。冠松次郎は、長次郎にとって終生の山の師であり、友であり、雇い主でもあった。その後、長次郎は劔岳よりも黒部のガイドとして知られるようになった。

冠松次郎は著書である「黒部と山の人達」の中で、「私も黒部では随分長次郎の厄介になった。実を言うと私も長次郎もその他の人達も一人として黒部の廊下を知っている者はいなかった。その知らない同志が道連れとなって激流と闘い、岩壁に挑み、しかし気ままにのんびりと黒部の全流を渉猟した。」と語っている。長次郎の五十代はこのように黒部の名ガイドとして生涯で最も輝いた時代であった。

## 3. 長次郎とライバル平蔵

劔岳の長次郎谷の隣には平蔵谷がある。井上晃の「立山ガイド列伝」によれば<sup>9)</sup>、常願寺川を挟んで、左岸側の大山村には宇治長次郎や宮本金作など柴崎測量隊の劔岳登頂や冠松次郎の黒部探検で名を上げた山案内人たちが生活し、一方、右岸側の芦峯寺には、立山ガイドの前身とも言える「仲語(ちゅうご)」と呼ばれる山案内人たちが生活していた。仲語は登拝者を立山に案内し、開山の縁起や由緒などを語り聞かせていた。彼らは何百年も山案内を業としてきたが、長次郎たちの大山村グループの台頭と共に危機感を募らせ、やがて山歩きが強く、地理にも精通していた佐伯平蔵(1878~1943年)が頭角を現してきた。平蔵は明治末期から大正にかけて芦峯寺ガイドの中心的存在となり、立山仲語の中でも最も早く登山家と山行をし、後に劔岳に平蔵谷の名を残した。長次郎と平蔵は立山ガイドの良きライバルとして同時代を生き貫いている。

芦峯寺の山案内人たちが、山案内のほかに狩猟、釣師、<sup>こま</sup>植人となって生計を立てていたのに対し、長次郎らの大山村の山案内人たちは、山案内以外に農業や炭焼き、砂防工事などで生計を立てて、殺生をしない熱心な仏教信者が多かった。

## 4. 長次郎の人間味、そして晩年

小島烏水は長次郎を「棟梁の材」と高く評価し、吉田孫四郎は「長次郎は一点の非難すべからざる資性を有し、余等年来の登山に於いて未だ嘗て見ざる好漢である」と賛美

している<sup>10)</sup>。田部重治も「……性質が温厚で人と争うといった風なところが微塵もなく、いつもにこにこして、それでいてよいよ難場へ来ると異常な能力を発揮する男だった」と回顧している<sup>10)</sup>。そのほか、フランス文学・文化の著名な研究者である桑原武夫(1904 - 1988年、京都大学名誉教授、1958年には京都大学山岳会の隊長としてパキスタンのチョゴリザへの登頂を成功に導いた)も長次郎の思い出を書き残している。

面白いところでは、1935年(昭和10)の夏に鉄道省主催による夏山祭が東京のデパートで開催され、各地の名山ガイドが一堂に招かれその中に長次郎もいた。その直後にNHKから放送された「名ガイドを囲む夏山座談会」の中で得意の「越中おはら節」を披露したようである<sup>10)</sup>。

長次郎の晩年には、太平洋戦争が激化し、山案内という生業が成り立たず、一介の村老として穏やかな日々を送ったようだ。1945(昭和20)年8月15日の終戦の知らせを臥床で聞き、涙を流していたと言われている。その2カ月後の10月30日に天寿を全うした。

新田次郎原作『劔岳〈点の記〉』では、宇治長次郎は重要な役割を演じているが、前述したように、柴崎芳太郎による「越中劔岳先登記」には宇治長次郎の名は見当たらず、宇治長次郎の名を登山界で高めたのは石崎光瑤らの書いた紀行「越中劔岳」であった。そして、以降、冠松次郎をはじめとする日本山岳会の著名な登山家らとの出会いにより、宇治長次郎の名山ガイドとしての名を不動のものにした。

しかし、もし1907(明治40)年のひと夏、長次郎が陸地測量部の人夫として柴崎芳太郎の率いる測量隊に随って劔岳周辺の山々を跋渉していなかったら、劔岳も黒部峡谷も知らない一農夫としてその生涯を終えていたかもしれない。

#### ■参考文献および注記

- 1) 定本室生犀星全詩集(1983.11) 第二巻, pp.394, 冬樹社
- 2) 山と渓谷社編(1971.7):世界山岳百科事典 宇治長次郎 pp.75, 山と渓谷社
- 3) 岳人編集部(1983.7):岳人事典 宇治長次郎 pp.102, 東京新聞出版局
- 4) 新田次郎 「劔岳〈点の記〉」文春文庫(新装版第4刷, 2007年7月15日)
- 5) 近藤信行編(2003.9):岩波文庫 山の旅 明治・大正篇, PP.252-257, 岩波書店  
(柴崎芳太郎「越中劔岳先登記」として談話風記事が採録されている)

- 6) 柴崎芳博(1980):「劔岳登頂をめぐる一ある疑問点について」, 山岳75号, pp.166-181
- 7) 参考文献2)によれば,「廊下」とは川筋の両岸にほとんど直立に近い高い岩壁が迫って,流水を挟んで渓谷を形づくって連なり,水はその狭い流路を流れるような地形を,信州や越中で廊下という(pp.753)。峡谷とはほぼ同義語と考えられる。
- 8) 新編日本山岳名著全集3(1976.11), pp.121-314, 三笠書房  
冠松次郎「黒部渓谷」が採録されている。
- 9) 井上晃(1987.9):立山ガイド列伝,日本の名山8 劔・立山と北部アルプス, pp.96-101, ぎょうせい  
井上晃(1997.4):立山ガイド列伝,日本の名山8 立山, pp.102-111, 博品社
- 10) 松村寿(1967):劔岳先踏前後3 宇治長次郎小伝, 山書研究9号, pp.15-31
- 11) 国土交通省国土地理院北陸地方測量部(2008.3):劔岳測量100年—100年の想い時空を超えて—

#### ■代表的な登山家

- \* 1 田部重治(1884~1972年):東京帝国大学在学中に小暮理太郎などと知り合い登山に関心をもち,1908(明治41)年8月に妙高山に初登頂,その後,日本アルプスや北アルプスの高岳に登頂,とくに奥秩父に親しみ,その開拓に努めた。「日本アルプスと秩父巡礼」,「山への思慕」,「わが山旅50年」などの多数の著書がある。
- \* 2 冠松次郎(1883~1970年):黒部川の開拓者であり,1902(明治35)年頃から富士山や日光の高峰に登り,1909(明治42)年に白馬岳から祖母谷を下って以来,黒部川の虜となる。宇治長次郎との黒部峡谷の探検は有名である。黒部峡谷の十字峡の命名者である。また,1915(大正4)年には,劔岳平蔵谷の初下降など,記録的登山を行った。「黒部渓谷」,「山溪記」などの著書がある。
- \* 3 小暮理太郎(1873~1944年):第三代日本山岳会会長。1893(明治26)年の妙義山登山から本格的な登山を開始し,明治末から大正初期には奥秩父の山々を歩き,その開拓に熱を入れた。1915(大正4)年夏に行った毛勝・劔・赤牛・烏帽子岳の大縦走は探検登山史を飾った。晩年はヒマラヤの研究に没頭した。「山の憶ひ出」,「中央アジアの山と人」などの著書がある。
- \* 4 石崎光瑤(1884~1947年):1909(明治42)年に河合良成・吉田孫四郎・野村義重らと同行,宇治長次郎を案内人に室堂から真砂沢を経て,登山者としては初めて劔岳の登頂に成功した。1916(大正5)年11月~翌年7月まで単身インドに渡り,雪中のヒマラヤ山中を渉猟した。京都派日本画壇の重鎮としても有名である。